386
46

梨葉第二句集

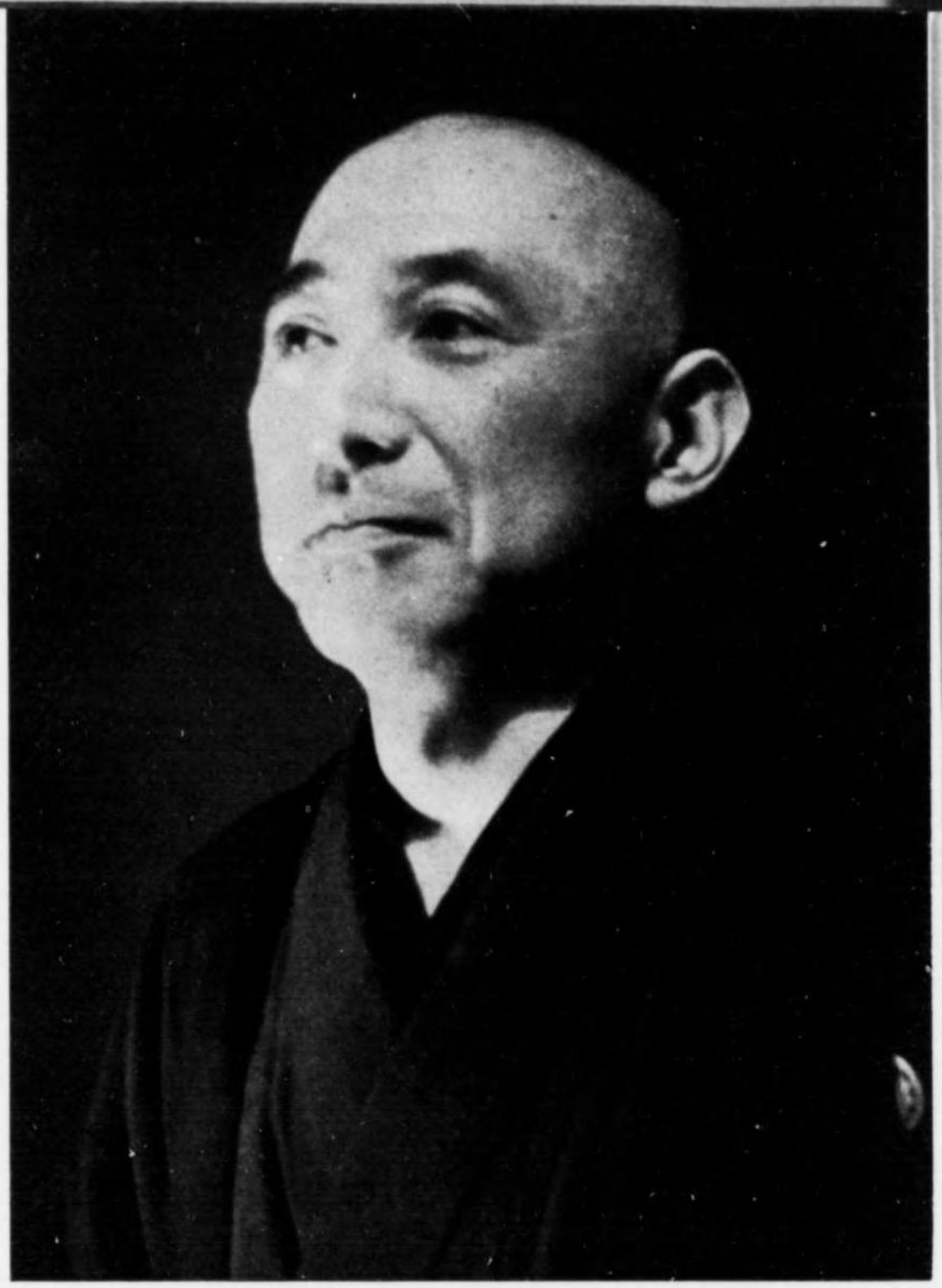
始

帝國圖書館藏

この句集を和紅妙光大姉の靈に捧ぐ

特223
831

梨葉第二句集



梨葉第二句集

梨葉第二句集目次

著者小照
敍
昭和五年八月以降の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 一
昭和六年中の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 七
昭和七年中の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 二三
昭和八年中の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 六九
昭和九年中の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 九九
昭和十年中の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 一三一
昭和十一年中の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 一四五
昭和十二年八月迄の句 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 一六一
類題別索引 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ 一七三

敍

わたくしの第一句集には、昭和五年七月までの作品をまとめてあり、それを出版してからもう九年にもなる。

こんど、その以後の八年分をまとめて、昭和十二年八月までのものを一冊にした。梨葉第二句集といふわけである。

すこし考へるところあつて愛吟を創刊したのが昭和五年の二月であつた。ことしの五月、愛吟の百號が出たといふことから思つても、この第二句集には、わたくしにとつて忘れてならない時の流れが刻みつけてあるといふてよい。

いろ〳〵のことが眼の前を通りすぎた。ほんとにいろ〳〵の思ひもうけぬことの多くが消えて行つた。功利的で、むしろ利己的な、

假面的なものが數かぎりなく流れて行つた。しかしもう、わたくしの俳句も俳句的思惟も、現在ではすつかり以前のものではなくなつてしまつてゐる。それからいへば、この第二句集もまた第一句集と同じやうに、やはりひとつの淡い思ひ出に過ぎなくなつてしまつてゐる。家集をまとめるときの感想といへば、大方さうしたものなのではなからうかとおもふ。

旣刊の第一句集には長文の叙跋を添へたが、この第二句集にも、實は、それからあとを受けて何か書いておくのがよいとはおもつたが、しかし、もうその意地が通らなくなつた。先年わたくしのたつたひとりの娘、わたくしの俳句をよく了得してゐてくれた和紅に死なれてからといふものは、わたくしには何もかも面倒くさくなつてしまつたからである。

そのうへまた、このごろではからだがわるく、低血壓とかのため

に脈搏が減じ、貧血卒倒することが屢々であるため、ものごとをつめてするといふことを避けてゐる。みつちり文章を書くなどは思ひもよらぬことでもあるからである。

と、いふわけで、この第二句集の淨書編纂までもすべてを渡邊春輔君の好意に委せなければならぬことになり、近藤白亭、木下子龍兩君の協力を得て、印刷校合製冊分頒のことまで、一切をあげて三君の慈悲に縋つた次第である。三君にはお禮の言ひやうがない。

昭和十三年五月二十五日

千駄ヶ谷の草廬にて

上川井梨葉

梨葉第二句集

昭和五年八月より
昭和十二年八月まで

（七百六十八句輯録）

昭和五年　八月より十二月まで　（十八句）

昭和五年

偶感

紫陽花や庭の井水に臭（かざ）のある

月遲くこほろぎ聲をやすめけり

下加茂のやどりにて

秋の日や高野（たかの）川原の草の丈

洛北小町寺を訪ふ

しづ〳〵と老尼のこゑや秋の蟬

鞍馬みちに別れて

貴船路をのぼるそびらに秋日かな

貴船神社社頭

みたらしに落つるや秋の山の水

庭前

月よくてなほ燈籠のあかるけれ

旅立にかぞふる月の齢かな

夜の戸に音たてそめぬ秋の風

わだまし成りて移る。さゝやかながらもおもむきのとぼしくて、こゝろすまぬことばかりなりけり。利牛の附句に

京は惣別家に念入

といへるを思ひ出でゝ、さこそとうなづかれぬるも詮なきことにこそ。四句

秋風や立てゝけうとき床柱

うそ寒やひと夜ふた夜の壁の臭(かざ)

うち〳〵に祝うて住むや菊膾

閉てまはす縁の硝子戸冬を待つ

松樹二本もうつし植ゑぬ

庭の松に冬待つ葉を巻かせけり

籾莚敷きひろげゆく百舌鳥の聲

匏生居

コスモスも伸びたり君が背たけほど

うす〱と晴れたる空や年の暮

再び豆相の震害

なゐ〱て痩せ立つ冬の温泉山かな

昭和六年

一月より
十二月まで

（九十八句）

ぶり〳〵や房も匂ひの棚餝

掃初や帯にたばさむ對の袖

桁高に丁としめるや店卸

尺杖や手斧始めの檜角

禮帳をつとめあげたる三日かな

注連の戸の日影映ゆるや飾臼

雪の前膝の寒さや初茶湯

敷砂を盛りて挿しけり鳥總松

注連あきの空もくづるゝ寒さかな

うたてやな鈴も千切りて猫の夫

畠の菊萌ゆるにまかせ痩せさせぬ

家柱になると笑へや木の實植う

東海の砂の膚目やあさり貝

青ぬたや箸にちいさき湖の魚

殘雪や北へ〱と鞍馬道

殘雪や水澄みそめし池の岸

敷石の及ばぬ樹下や殘る雪

梅咲いて畝もつくらぬ畑かな

雛の膳さてもふさはしく盛られけり

紫影先生の「かきね草」をまた取りいでゝなつかしくも讀みふける

句主い・ます柳櫻の都かな

疎垣や土に影ひく畑の春

風だちて空のにごりや畑の桃

通ひ路の土の深さや桃畠

戀すてふ人の畑打つ桃日和

沼照りに手拭冠る桃見かな

山寺や榎芽立ちて遲櫻

坊が妻を知る人ありて櫻狩

雲水のねぶた聲して花曇

拝観の札のよごれや花曇

窯元に客の出入や花曇、

摘草に掘り得てうれし野木瓜かな

竹藪に人ゐるらしゝ春の雨

魚店(うをだな)にのこる下魚(げうを)や春の月

乗り込めど待つ人遅し汐干船

供方の船に酒やる汐干かな

近江路より叡山にのぼる

坂本の花吹きのぼせ湖の風

ケーブルを捨てゝ

たか〴〵とのぼりて湖の花ぐもり

根本中堂

駕籠舁も花に憩みて茛かな

四明嶽の下にて

隈笹のふかき杉むら春日かな

八瀬口に下りて

花ちるや八瀬の平の遊園地

淀のわたりにて

春の雲八幡へかけて明るさよ

男山のふもとにて

桜の花や詣での道の石燈籠

橋本の渡船にて

艀子の妻小屋守るらしも春の風

妙喜庵緣起

膝ついて寄るや角(すみ)爐の木地爐緣

寶寺大黒天

紅椿咲くやめぐらす寺の垣

嵐峡に遊びて

山の花見あぐる橋の袂かな

若王子の花

京人に案内たのむや花の路

春景都踊

茶席より客なだれけり花の幕

伊勢神宮太々神樂奉獻

青嵐に點々とうつ羯鼓かな

犬山にて

雨蛙なくやお城の閑さに

名古屋城にのぼる

城高し見ゆるかぎりはみな新樹

名古屋徳川邸園遊會

蠑螈や床几ひきずる草の上

名古屋公會堂懇親會餘興

「卯の花」をしづかにをどる扇かな

蓮の浮葉梅は茂りをいそぎけり

藻の水の寂然たりや蓮浮葉

蓮の浮葉日高き水のにごりかな

うつくしき水ゆく野路の薊かな

萱の葉もたくましさうに薊かな

用瀬東風翁と語る

花卯木保(ほう)津(つ)くだりし話かな

ものさがすついでにいだす團扇かな

竹工や生(き)布(ぬの)につきし削屑

新川集句會席上吟二句

すゐれんの池の岸まで下りて見し

櫻桃の連珠うれしとつまみけり

袖越しに晝の蚊さすや八仙花

名ある井をいまも汲みゐる夏の園

どくだみや馬の足掻(あがき)に立つほこり

どくだみやなほざりがちの園の奥

山なかに一つ家見たり桐の花

一八の屋根より高し桐の花

丹楓老よりものたまはりて

早鮓に津久見の鯛のそぼろかな

新川集句會席上吟五句

夏シヤツのまゝの御寫眞宮殿下

夏シヤツの胸のかくしに莨かな

眞二つにして潤美たる西瓜かな

西瓜切るは女紅にあらず亭主かな

葉廣木もしづかに月の光かな

歌膝に月影うけて仰ぐかな

燈を消して月にしづもる疊かな

ひろやかに机邊ものなし秋の風

木瓜の實を見出し頃の大いさよ

帶下げし子の可愛さや地藏盆

露ふくむ夜空になりぬ地藏盆

木槿咲くところを入る百姓家

夜來の豪雨しづまりければ

草の葉もひたぶる濡れし秋の雨

秋の雨草のいたみのまさるかや

秋雨のそゝぐにまかす花畠

草庵燈下

夜の雨なごりの蟲の聲ひとつ

踏むほどに落葉の音を立てるのみ

吹かれ泣く地上の落葉われを追ふ

一吹に柚をはなれし木の葉かな

木の葉狂ひくるひ舞ひ出でどこへ落つ

葉洩れ日をしかとたのみに茶梅かな

小金井堤の鈴木新助氏別園吟行四句

日ざゝねど濃きを誇りに石蕗の花

園内の隈なき落葉いつ掃かむ

我も踏む人も踏む音落葉道

つはぶきの花のあとにも冬日向

よきところ梅を培ふ冬日向

極月雜稾二句

學校は師走しづかに門あけて

嫁(よめり)するひとに師走のなほはやく

昭和七年 一月より十二月まで

（百十三句）

昭和七年

粛として初日まともに射輝く

玄關に凧よ羽子よと子等の春

道端や奥まる宮の松餝

福壽草書齋にこもる博士かな

追ひあげて猪の行衛に日暮れたり

狼の寄つて來さうな夜の風

狼も猪も撃つべし壁に銃

時雨空兎狩る山高からず

昇り來てとまらぬリフト燈影寒む

冬の月檜垣に沿うて作る闇

冬シャツをなほ用意して温泉の旅

冬シャツの體操教師ふとりゐる

八つ手の實つきすぎにけり霜に泣く

ゆつくりと村人ありく冬木立

春いそぐ土のよろこび風なき日

熱燗や大阪小唄のびして

親方の顔に日のさす鮪賣

小金井鈴木新助氏別園吟行四句

手爐寄せて見出でし梅の花いくつ

梅早し風のわたりもしづかなり

日をかくす餘寒の雲を野に憎む

芽ほぐるゝ青木のすがた餘寒かな

外房をめぐりて

浦々や春の白浪どこもどこも

同じく鴨川あづまやにて

夜もすがら春の浪音よき宿ぞ

同じく觀迎句會席上吟三句

春泥や垣の日もゆる紅檜

春泥や鶸の梢をそと仰ぐ

花になるみちのべ草や春の泥

春の水ぐら〳〵欒のひとよどみ

野遊

蒲公英を繪にせうものと草に坐す

九段靖國神社の花は十とせがほど見るふしもなくて過ぎけるを四月六日の夕さり零雨氏にともなはれてかしこに行暮れぬ

宮守の栖や暮るゝ花の奥

三幹竹氏が皆山居は枳殼邸の水をひき臨池の眺めうつくしく鶯來鳴くときゝつれど四月十二日は折柄の雨聲はげしくて

花の雨池ひろやかに滿溢す

かなしきはなしきゝもしてかたりもぞする夜のふけぎはあすはいかにとあんじつゝも。四月十三日

夜もすがら雨は枕に花の宿

うつくしき子のさびしげなるはよそめにもいとしくて粟田口楠の日影のいしだゝみわたりゆくほどに。四月十四日

花を見る人に踏まれなすみれぐさ

圓山長樂寺のうら道はゆく人まれに仰げば眼にはとしごとのけしきうれしくて。四月十四日

山の花木ごみに咲くもうつゝかな

稚きものこそほしけれといへるわかき妓のゆきずりの子守がせなに手をやりていへる。四月十五日

ねむくなる子の顔うれし花の本

さる方の愛孃がもてなしぶりにふしおもしろう歌ものゝ京風をうつしてゆかし。四月十六日

彈く琴は花の曲ともきゝぬべし

鑾々氏道頓堀をつとめてのち神戸花街の稽古におもむくとて文通あり筍ひとかごをたばる。四月十八日

竹の子のはしりや花もしまひ頃

戸塚より足にまかせてゆくほど鎌倉をたちいでてといはぬげのさまをかしう旅路の花聟にもあはぬぞことわりとざれ言のうちに。四月十九日

花盡きて堤ひらけし田面かな

隅田（すだ）のけしきかはりはてにきといふに詮なくむかしがたりのなほなつかしくて。四月二十日

君が膝にさくら餅籠船の中

南松庵植樹の會席上吟二句

花時のお庭番にもあがりたや

花時のための巡査に出會ひけり

水郷の巻

五月二十二日の小晝時、小見川驛に着く。町長、商工會長、觀光協會長其他土地有力者の先導にて、黒部川畔より發動機船を進めて息栖の宮に詣づ。幸川秋峯氏句あり。

大利根を島へ渡るや行々子　秋峯

まこと、そのあたりは眞菰生うる水郷のけしき剖葦鳥のこゑしきりにきこえてさびし。

水郷の空のひろさや大南風

とは、船中に立ちての余が感懐なり。驛につゞいて堀内竹嶺氏一句あり。

南風に水も眞菰も押されけり　竹嶺

茫たる水を漕ぎくる扁舟こそは、眞菰刈る人のなりはひなり。

眞菰刈小さな舟を漕いで來し

息栖の宮は岐大神を祭り東國三社のうちなり。一の鳥居は利根川の水に立ち、水底に忍鹽井ありて眞清水を汲む。

千早振神の忍鹽井沖中にわけて淡しゝ神の忍鹽井

といへる古歌も尊しや。藤原朝臣時朝が歌

鹿島灘於岐栖の森の時鳥船をとゞめてぞ初音きゝつる

と詠めりけるは、こゝのことぞ。神域堂宇、寂びに寂びたり。俗なる文化のなほ及ばぬこそうれしけれ。句碑に、

この里は氣吹戸主の風寒し　　はせを

とあり。風寒き心地せらるゝほどに幽嚴なる靈域なり。

衣更へて息栖の神に詣でけり　秋峯

の一句、けだし、同聲相應ずべし。

梅雨の空あかるくなりぬ神の前　○

小見川に船を返して上陸。埋立の處女地を通りて宴會場に赴く。席間美妓數百、體軀堂々、線の太きこと意外なり。舞技また濶達、スポーツ踊の如し。佐原男に小見川女といへる俚言あり。蓋し意深くして凡骨の知るところにあらず。

蒼鷺の聲渡す水夜の闇　○

自動車を驅つて香取の宮に詣づ。廣前にて稚兒の田植舞を奉獻す。白衣紅袴の少女十

餘人、花笠を肩につけ眞榊の小枝を早苗に擬し、神の石だゝみを御田とし、田植の神事嚴かに五穀成就の祈願をこめたり。淺川庭示氏一句あり。

花笠も重たし稚兒の田植舞　　庭示

うつくしくも寫し出したる句なり。

神事に紅さす稚兒や花うつぎ

佐原の町、伊能忠敬翁舊宅を訪ひ遺品を見る。その夜はこの町に一泊の定めなり。倚招かれて水郷公園の饗宴場に向ふ。夕日草を染むる頃なり。宴果てゝ旅宿に送られ一浴休息、折から松浦病院長偲堂氏より迎への自動車といふ聲に、また服を改めて同氏邸に赴く。竹嶺氏、南川氏、庭示氏、一宇氏等、宿の浴衣のまゝにて同行す。

偲堂老、令孃と共に厚遇慇懃、浴衣の諸氏頓首閉口、をかしさを抑へて俳談縦横、盡

帖短册に醉筆を揮ふ。

偲堂邸

窓近く蛙のこゑや五月闇　　庭示

靜かに夜の更けゆくさま、うれし。このへんは至つて蚊が多く、もう蚊帳を吊りますよ、とは主人の言葉、香取は蚊取、鹿島は蚊島とお伽噺めきたるを、けふの案内者に聞きたる、思ひ起されてをかし。

○

あくる日、梅雨ぐもりなり。早朝、水郷公園より新造船さつき丸といふに乗船して發つ。船中の徒然を慰めんとにや、佐原の美妓數百人同船す。上甲板も中甲板も洋室も日本間も美人にて埋められたり。この船の處女航を祝ふため、船長はマイクロフォン

を通じて、各室に聲を響かす。歡待至らざるなし。
利根川と霞ケ浦とを繋ぐ運河は、水位の關係にて閘門をしつらへ、さながら東洋のパナマなりといふ。船はしづかに霞ケ浦に進みゆくほどに、風すこし强まり、冷氣なり。やがてまた利根の本流を下航して潮來を過ぐ、町有志の好意にて河岸に棧敷を張り、名物あやめ踊を舞ふ。船と岡とにて歌舞絃聲相競ふが如し。十二橋を過ぎて、雨至りければ、一同船室に籠る。余は揚子江を知らねど、むかし、大同江牡丹臺下に絃歌の船を浮べしことあり。その悲歌哀音は悠々たる水に響きて今に至るもその思情を忘ぜず。それとこれとは處も人も異れるに、徒らなる船中の騷音、聊か哀愁を感ず。

船室にて用瀨東風老一句を示さる。

梅雨空や見渡すかぎり水の鄕　　東風

まことや、水を出でゝ水に入る、大利根の水の里、廣き眺めのおもしろきかな。

○

船を大船津につけて鹿島の宮に詣る。三社めぐりの終りなり。かの老樹の欝蒼たる下にて、鄕土神樂を奏す。數人の若者、笛に鉦に太鼓に小鼓に、鄕土の誇りを奏で出づれば方三里の神域、隅々までも響きわたりて、めでたしともめでたし。

若葉風神樂の高音ひゞきけり　　東風

要石、御手洗池など見終りて、また船に戻る。

○

青葉若葉見上げてはゆく大立樹

大利根の航運は、むかし余が生家の業に加へられたり。若き頃、江戸川を溯上、關宿

より本利根を下航して銚子に出でたる一再ならず。外輪船通運丸のことなり。今日は新式の遊覽船にて松岸、波崎を過ぐ、今昔の感なき能はず。

夕方、雨ふる中に銚子につく、迎へられて山サ、ヒゲタの工場に入る。公正會館の宴には銚子美妓數千、霓裳羽衣の曲を演ずるあり。チリカラチャンポンポンとは、をかしき唄拍子なり。

自體この頃、何々小唄と銘うつて、いかゞはしき曲節を作るもの音樂家の中にあり。なべて盆踊化せんとするに似ておそろしきことなり。されど、銚子は大漁踊の本場なれば、かの漁夫が濱邊の音頭を、そのまゝに囃すなりと聞えたれば、あながちには思はず。

○

翌曉、日の出を拜むべしとて東風老にゆり起されたり。午前三時から起きてゐますと。老人はなにさまめざとくて、同室の竹嶺氏も苦笑せらる。夜來の雨拭へるが如くに晴れて、利根河口の美觀、淡墨の大景なり。須臾にして銚子名物の濃霧いたる。鷗も翼を收め、舟行とゞまる如し。

○

夏の霧日輪海をのぼる頃

川口神社に詣で、犬吠埼の燈臺に赴く。臺長の案内にて限なく參觀、ラヂオコンパスの裝置を巡覽して辭す。犬岩、君が濱の眺めも大きく、曉鷄館にて午餐の宴あり。ほんものゝ大漁踊を見る。中に七十あまりの媼あり。出でゝは舞ひ退いては唄ふ。その姿、その元氣、濱の女なればこそ。

大南風太平洋を吹き寄せぬ　竹嶺

薫風や屋根に石おく蛋の家　庭示

飯沼觀音、銚子築港に時を移し、八つ時すぎて舞子の驛を發車、歸路を急ぐ。車中睡夢の中に、なほ逸したる句案を想ふ。

燈臺の出口に茶屋や夏蜜柑

犬岩はうしろ姿か夏の海

潮風に花のいたみや濱茨

涼しさの鯛の餌桶や漁家の軒

皐月波岩間々々をくだけ來る

砂山につゞく轍や夏蕨

蜑の子の潮浴びそむる皐月かな

夏姿誰が名づけけん似たり貝

門庭にあやめ咲きたつ海の茶屋

たまにくる田舎電車や桐の花

新宿愛吟會席上吟

蚊柱や椎に壓さるゝ裏の塀

日本橋愛吟會席上吟

桐咲いて草は脛越す野道かな

新川集句會の第二年を迎ふ

青梅のしかと葉陰にならびたる

竹の落葉

○

六百年の由緒ある禪寺も、いまは洛西衣笠の山麓、松尾村にその名をとゞむるに過ぎず。兵火に燒かれし遠き昔の物語も、近くは維新の改革に寺領を奪はれたることも、寺院の哀史に殘るのみ。伽藍の結構はなく、寺寶は失はれ、庭樹泉石までも持ち去られ、末世の法滅、聞くにつけ見るにつけ、涙ならぬはなかりけり。

荒廢と幽寂と、その趣の忘れがたくて、ひとり竹藪の徑を縫うて寺へのぼる。

若竹も衣ぬぎすてゝ地藏院

若竹の落皮音あり藪の中

木綿の白衣、無雜作に着流したるお住持寛宗師、手拭の頬冠り、大鋤を肩にして竹藪の中へ這入りゆく。眞竹の子、矗々と立つ中を、まだ若々しきを擇びては、あれを起しこれを掘り、たちまちにして籠一杯の收穫なり。もう藪蚊しきりに襲ひ來て雜澁す。

ひと籠をやすく掘りぬ眞竹の子

藪蚊はらひく筍を掘る和尚

昆布と竹の子とを水だきのまゝ味したる本精進に、貰うた酒があるから振舞ふと言はれ、お住持と對酌す。

「わしは先日、大阪の中座へ行た。」

「へーえ。お說敎ですか。」

「阿呆なこと。芝居見物ぢやがな。」

「…………」

「實はな、中座は知らんのや。そこでな、大阪の人がな、連れていてやるといふもんやで、行た。」

「をかしいな。和尚さんが芝居を見るなんて…………。」

「さうかな。だがなかく面白かつたよ。」

「…………」

「だがの、食ふものがみな臭いには閉口した。」

「さうでせう。芝居で精進料理は無理でせうからね。」

「握り飯でももて行たらよかつたんや。まあ、食はずにゐたかて、その方は一向苦にならんけど、それよりはな、貧乏寺の和尚には、往復の電車賃が惜しいてなあ。」

呵々大笑す。

まだ日は高いし、ゆつくりと飲むがえゝ、水鷄は暮れ方にならぬと啼かぬと言はるゝまゝに、苔蒸したる庭の面をあかず眺めて、時をすごす。

庭苔にしづまる竹の落葉かな

水鷄聞かんゆふべほどなく暮れ方の

○

辰中氏は痩軀長身、老いてます／＼旺んなるはめでたし。眼鏡をかけて茶器をひねくる閑(いとま)あり、口合ひ川柳を眞額に駄句るの樂しみあり。氣持わるければ一日數度の沐浴を煩はしとせず。その癇癖屋が醉へば踊る、疲れてはすぐ寢る。洒々磊々、さうして、めつたに家には居ず。

仲夏の一日、氏を訪へば案の定留守なり。そのまゝ奥まりたる居間に通りてあるじの歸庵を待つ。窓に響くものは白河の水の音、前栽の竹の葉を騷がすものは東山の薫風なり。盆立の一服は、夫人が心づくしにこそ。

鯖賣のかどゆくこゑや梅雨晴間

○

しばらく訪ふこともなかりし高臺寺の老庵主を、ふと思ひ出でゝ矢も楯もたまらず會ひたくなり、突然も突然、庵主を驚かしたるは、梅雨空のすこし明るくなりたる晝下りのことなり。

梅雨どきの挨拶ありて數寄屋かな

○

生飼一尾と書いて、AKは「いきだいいつぴ」と訓ませ、BKは「いけだいいちび」と放送す。言葉は處により時に應じて遷り變るならひなるべけれども、俳句に用ゐらるゝ文字の匂ひは、漢字なると假名文字なるとに從つて、それ〴〵の場合に色々の違ひあり。なほまた、字音のひゞきは流暢無凝なるを最上とすれば、使用文字に心を痛め、發音に意を配すること、俳句作者の常に用意あるべきところならめ。俳句の立場よりすれば、むしろBKに同ぜん。

にい〱とじい〱と啼く蟬のこゑ

○

吉田湖亭氏邸は御殿山の高燥地をトして閑雅なり。一夕招かれて句莚に列す。席に白水郎氏、南子氏、榑々氏など日頃顔馴染の諸氏あり。慶應俱樂部の句會を此處に移し

たるかの趣あり。更らに主人の好意は、圖らずも知白老、枚々氏、撲天鷗氏、松濤樓氏等、斯壇の重鎭耆宿に會することを得せしむ。若し席上に冬葉翠影の二氏あらば、一段と賑かなるべかりしに、當日は兩氏共に缺席なり。

邸內ひろく、樹々の茂りを梅雨空の夕明りに打ち眺めつゝ、洋館の二階の窓々よりは、品海の涼風を座に入れて、寬開句案しばしなり。

窓前の暮色に坐して薄暑かな

どの窓も薄暑の樹々を見埋む

○

片桐夫人にお嬢さん方と、四條菊水の二階のソフワに腰かけて、冷珈琲を吸つてゐるところへ、瀟洒な背廣姿の蓼々氏が、大阪から現はれた。忽ち話は劇評から藝談にう

つり、俳句の話はほんのちよんびり。それでも、氏が菖蒲百句を得んものと、芝居の隙をみては、西大寺から奈良坂のあたりまでも歩き廻つたといふ熱心振りに感動し、運ばれたチーズに黒ビールを飲みながら、よく喋りつゞける。

五時に開く中座の勧進帳に間に合ふやうにと、蓼々氏は歸つてゆく。

ふと空虚に襲はれた態ちで、みなさんにもお別れして外へ出る。圓タクがうるさく來ては乘車をすゝめる。どこへ行くといふアテもなかつたが、すゝめ上手に乘つた自動車は、加茂の方へ向つて走つて吳れた。

出町から叡鐵へ乘り、貴船口で降りて夕方の山道をホコ／＼と歩き出す。

谷水のこもるひゞきや靑芒

ついこのあひだは、著莪の花の眞盛りであつたことを思ひ出しつゝ、あの時、貴船神

社でお受けした鐵齋筆の寶船の圖を、表具屋にやつておいたが、あれはどうなつたらうと、そんなことまでが輕く考へられた。

虎耳草咲きひろがりぬ貴船路

お詣りをすませてふじ屋に寄る。女中がもう電燈をつけて吳れた。

甘子に鮎を食べて、そろ／＼歸らうとするとき、山雨沛然、雷鳴さへ加はつた。

につゝじの花に來かゝる雲の影

夏雨やにごりのはやき澤の水

亭主に聞けば、乘合バスは六時限りで、もう無いといふ。電車は八時半頃でしまひだといふ。時計を見ると七時をまはつてゐた。

尼さんが二人（ふたり）、雨中の山道を上（のぼ）つてゆく。大方、夜泣峠を越して鞍馬山へおこもりを

するのであらう。もう暗闇な道だ。
提燈と傘とを借りて電車まで歩く。道々澤音の高きに驚きつゝも、雨の中飛ぶ螢火のうつくしさを、陰々と見ることが出來た。
鼕々氏はいま頃、どうしてゐるだらうと、闇の中で思つたりした。
「さびしさは一尺消えてゆく螢」と、加賀の北枝が名句の姿をそのまゝに眺め越して、やうやく電車驛に辿りついた。

螢火やゆくてに見ゆる山の形(なり)
やみかねし白雨の中や飛ぶ螢
螢見の人にも會はず雨今宵
竹叢と見ゆるあたりに螢落つ

昭和七年

雨の闇大きくひかる螢かな
さびしらに草のぬれ葉の螢かな
風さそふ雨に流れて行く螢

昭和七年

王子名主の瀧

茶室ありて瀧の音よくきこえけり

晝の蚊をにくめど園の景に坐す

熱風

ことしの暑氣は格別にきびしく、筆者も少々健康に異狀あつて、門外不出の數日を念力マッサージに暮してしまつた。世間の人は海だ山だと、不景氣知らずに騒いでゐるといふことであるが、生來が怠けものゝ上に搗て加へて人混みが嫌ひなため混み合ふ電車汽車が恐ろしく、汗をかきに海へ行く勇氣もなし、筋を凝らしに山へ登ることもないと悟りを開いたつもりで、すつかり籠城の臍を固めてしまつた。

諸處方々から暑中見舞のハガキがくる。一切頂戴し放しでお禮やお答へは致さぬ。不精だからである。その中から二三のおもしろいものを拾ひ集めて披露することにしよう。

×

「平生自想無官樂。第一驕人六月天。」

「これは怠け者の愛誦する詩句です。六月の炎天になれば、自分は悠々として寢轉んでゐる。人はさぞ浦山しく思ふだらう、さうだ、これが無官のたのしみの第一だもの………といふ意味です。」「近ごろは夜中になつて月が出ます。窓をあけて蚊やりを焚いて、時々は電燈を消して月を眺めます。と、机の上、まはりにひろげてある本が、みんな白く光つて、「昔の文學青年の甘い感傷」を感じさうになります。」

「もう、めつきり蟲のこゑが殖ゑました」

といふのを受取つた。これは暑中見舞でなくて、身邊近信である。昔の文學青年云々の辭句は、「故人春夏秋冬」の輪講會の席上で蕪村の或る句に對して言ひ放つた僕の批

評である。彼氏、餘程こいつが氣に入つたと見える。しかし、それにしても、無官のたのしみは飽くまで街氣があつておもしろくない。現實逃避の無氣力である。

旅人と我名よばれむ初しぐれ　　芭蕉

の境地とは相去ること遠しと言はねばなるまい。

×

「俳諧式目に關すること、是迄深くも調べざりしことに候が、連歌や貞門は別問題として、蕉風と稱する連中がその連歌や貞門のいろ／＼な事柄を持込んで、傳書的指導書をデッチ上げた馬鹿らしさに驚き申居候。實に「連句の桎梏」に御座候。始皇帝を地下より起し來つて一切の指導書を燒き捨てねば、連句は發達せざるべしと存申候。此意味に於て小生近年「芭蕉に返れ」と叫び居る事に御座候………………」

これは紫影先生よりの文通の一端であつて、暑中見舞とは言はれぬのであるが、俳諧の眞の研究家である老先生のお言葉として傾聽する。「芭蕉に返れ」とは今日の俳句に於ても亦然りであると思ふ。「連句の桎梏」であるところのものは、すべてこれを否定して了へ。さうして同時に俳句に於ける一切の價値説を否定し去つて了はなくてはならぬ。而して最も力强く現實を肯定し現實を直觀せよ。而して深く、眞人芭蕉を味ひ、芭蕉に返れ。

×

鬼子母解脫は坪内博士の書下ろしで、歌舞伎座の六月興行に上演せられ、梅幸が夜叉牟支迦の妻訶利帝母に扮した。何にしろ五百餘人の子を生んだ上に業因の輪廻に依つて、天女殊麗の容貌に反し、心は生得の夜叉と同じく、食人鬼となつて日毎に他人の

嬰兒を盜んで之れを食らふこと一千餘兒といふのだからものすごい。かゝる惡鬼も大法の功力に依つて飜然と懺悔悟入し、禪定解脫の曉には普く人々の子寶に慈愛を垂れ、育ち惡しきを助け、子無き者には與へ、安產を守り、和合を導き、家內安全、病厄諸難を除く等の靈驗を現じたといふ譚は、大聖世尊釋迦牟尼佛が王舍城竹林精舍に在して衆生を濟度せられたときのことであつた。

鬼子母神樣といへば、夜叉の形相をしたのもあるが、また數人の子寶を抱いた天女のやうな聖母の御像もある。さうして石榴の實が御紋についてゐるのは、釋尊が鬼子母の子等にめぐまれた吉祥果を型取つたのであるさうな。

訶利帝母の譚と現在麻布の霞町にある立派な鬼子母神堂の緣起とを詳細に記述した暑中見舞の葉書を送られたのは不可解屋主人禍田了介先生である。氏は大正十二年以來

毎年小冊を上梓頒布して、不動を說き、觀世音を禮拜し、惠比壽大黑を頌し或はまた家紋を講じ、家憲を述べて、信仰生活の體驗を具陳されてゐる。その體驗に卽した貴重なる記述であるが故に、これこそ選擇本願の念佛にも喩へらるべきであらうとおもふ。

無上甚深微妙法。　百千萬劫難遭遇
我今見聞得受持。　願解如來眞實義

南無阿彌陀佛々々々と唱へてこの項は終りにする。

次にすこし毛色の變つたものを抄錄するとしよう。

×

「わが國にても昨年あたり、香ひの雜誌といふのが出たことがあつた。頁を繙くに從

つて菫の薫、薔薇の香氣が馥郁とするなどは、話に聞けば大層上品で思ひつきのやうだが、さてこれが俗惡極まる記事や挿繪をゴテ〳〵と色刷りにしたもので、安つぽくて惡くどい鑛物香料を、印刷インキへ混ぜ合はして刷つたものだから、たまらなく不快な感じを與へる。到底紳士淑女のお好みには緣遠いものであつた。」

「ところが、最近、巴里で創刊された新聞に、ラ・グロニールといふのがある。印刷インキを絕對無毒性のものにした上に、お砂糖やチヨコレートを入れて刷り上げるのである。だからこの新聞を讀んでしまつて、用がなくなつたら、ソロ〳〵と甜めてもよろしい、また羊のやうに、丸めて噛んでもよいのである。まるで「おやつ」のやうな新聞ださうだ。さしあたり明治製菓あたりで宣傳用に利用しさうなものだとおもふが、さて本場の巴里では無害無毒の發明でも、巴里ッ子が羊になつては大變、紙を食

ふとはインチキ新聞だといふ廉で、發行禁止に處したといふことである。」

「これと前後して巴里の町へお目通りした新聞に、ラ・ルミナールといふのがある。これは印刷インキの中へ黄燐を混ぜて刷るのである。恰度夜光時計の文字板を讀むやうに、これなら暗夜に燈火なしで立派に夕刊が讀めるといふ御重寶なものであるさうだ。こいつは慥かに「おやつ」新聞よりは時代の尖端をゆく新發明だ。が、もしこれを書籍に應用したとしたらどうだらう。夜學校では電燈の經濟になるかも知れないが、燈火親しむの候なんてことは烏渡御遠慮申上げることになるかもわからない。また螢雪の功なんてことも要らぬお世話になつてしまふだらう。」

少々ナンセンスだが、こんなことも銷夏の交通にはうれしいものゝひとつであつた。

燈を消して何を阿呆する納涼かな

あまりの暑氣に茹つてしまつて、句作には途に精根がつきてしまつた。こんなときには、肩の凝らぬやうな句を作つてみたいものだとおもふ。それは子規や蕪村の句のやうに才氣に走つた作品は刺戟があり過ぎて疲れを覺える。切れ味の冴えた句よりは、愚直鈍重な句が欲しいと考へた。童心に歸つた直感の句が得たいと思つた――が、どうしても駄目であつた。

電燈にカチン〳〵と火とり蟲　芳艸

といふ句は七月號の雜詠欄に入選したものである。小倉の少年芳艸君は、十三歳であるといふことである。この句の如きは到底凡骨の筆者には詠み出し得ない。隨處作主の强い力を以て、赱かりと現實を把握せねばならぬと泌々感じたことであつた。

熱風にもろこしの葉は揉まるゝよ

垂れ萩にかくも沓の見えて來し

くゝりてもあげても伏すに萩の花

わけ入りて歩々に見あかず園の萩

芒穗につと來て澄めど行く蜻蛉

流れ來て何に驚くとんぼかな

はた／＼や穗がちらほらと萱の上

鎌倉由比ケ濱篆々氏の宿にて五句

秋風や沖を遙かに潮の筋

寄せかへす浪の上吹く秋の風

暮れてくる海の方より秋の風

海見んと出で行く人に秋日かな

吹きぬける風は秋なる濱の家

袖摺るは園みちのべの芒かな

蟲鳴くや菊の姿をつくる人

向日葵を倒せしあとに蟲の聲

ゆく秋や櫻木されて日は斜（なゝめ）

八瀬口にならぶ葛家や多隣

もろ黄葉に庭山吹のありどころ

ごうと鳴る腹の病や暮の秋

よけてゆく畦の潰えに落穗かな

やゝ寒や永観堂の松の聲

垣にして行人褒める蔦紅葉

寺方や茶梅くづるゝ手水鉢

ゆく人のやがて遠しや多田道

新川集句會席上吟

夜はさすが小陽春の足の冷

沍て庭に日の落ついて十二月

そゝくさと離れゆく犬十二月

辻々はや朝日霑ふ十二月

昭和八年

一月より十二月まで

（百十二句）

癸酉元旦所感

せがれ滿二十年の春を迎へて夫婦悦びあへるを

子は育ちわが髪しろき年の春

元朝明治神宮に詣づ一句

ありがたや伊勢も代々木も神の春

年棚の燈映る梁の堅木かな

屠蘇汲むや酌に立ちたる愛娘

福引の塵さへ掃かぬ嘉例かな

敷きつめる簀の子の數や初湯殿

春三日たちて卷きこむ國旗かな

手を髪に袖口匂ふ初鏡

福藁や寒紅梅の下あたり

進溪雨氏哀悼

南無溪雨六十九の年の果

代々木愛吟會席上吟

世を今に裏白連歌傳へける

神田愛吟會席上吟四句

棕櫚蠅にみづけのきれて寒の内

毛布着て山邊の風に出で立ちぬ

傷兵に天恩あつき毛布かな

大毛布買へば喜ぶ母在して

正月二十日大寒の入り

かまくら壽福寺にて無量院十七年忌法要四句

膝寒しいまたてまつる普門品

月札の大の表や寒の寺

打敷に法燈たかし寒の寺

かまくらにゆかりの佛寒供養

一對の親王雛をまつりけり

御座敷へ革籠かゝせて雛かざり

大雲の押しうつりゆく梅の花

だら〳〵と道はくだりに垣の梅

梅百句庭樹をもちて思ひ立つ

高島南枝君生國京都へ歸るとて東京の店を閉ぢたりときゝて

京にある母おもふ身ぞ冴返る

知恩院門跡孝譽大僧正山下現有師貎下法算壹百貳壽を迎へられこのほど可祝の御催ありて奉句

十念をさづけたまひて峰の花

春曉や白雲あそぶ富士の山

山吹や堤のほこり被る家

木鉢出して彼岸の水に洗ひけり

なほ奥をかこふ土塀や彼岸寺

木のできて椿がくれの小家かな

芽立木にまた閑かなり龍安寺

去にかねし寺は木の芽の夕まぐれ

義烈莊と聽濤莊

○

四月二十三日朝、鎌倉驛を降りると、もうそこに芹澤南山先生の長軀と、米山雨厡先生の銀髪を發見して、一同恐縮した。けふの催しのために、わざ〱驛頭へお出迎へを戴いたのだ。遲客數氏を待ち合せてから、打揃つて驛前から電車。極樂寺の隧道をぬけて電車は停留場外に不時停車。そこが義烈莊への道であつた。

義烈莊といふのは南山先生の別莊である。稻村ケ崎の渓谷に臨んで、老樹鬱蒼たる陣鐘山の中腹に建つ山莊である。この山莊に義烈莊といふ莊名を撰ばれたに就ては、三つの歴史上の事實がその基因を成してゐるのである。

話はすこし昔のことになる。今から五百九十年の前に遡る。

元弘三年五月二十一日、新田義貞公は關東勢十二萬を率ゐて鎌倉に北條高時を攻めたとき、智勇兼備の大將は眞夜中の極樂寺に一隊を送り、未明に陣鐘を山上に打鳴らして北條方を誘ひ寄せつゝ、竊かに本隊を稻村ケ崎より海を迂廻して進めんとし、滿潮を利して船を海上に浮べ、黃金造りの大刀を海神に獻じて士氣を鼓舞し、愈々干潮を俟つて易々と大軍を渡し、一擧に北條方の本陣、材木座を襲うて大捷を博した。その時新田軍の屯營したのが、陣鐘山のこの谷地であつたことは、歴史上あまりにも有名である。かくして建武中興の礎石が据ゑられたのである。山莊の傍らに「敷皮の地」といふ平地があるのも、それらしくて頗るおもしろい。

今はこの谷地の狹いところに梨棚が作られて、折柄滿枝の花が閑かに咲き誇つてゐ

た。松樹亭々たる山上には殘花の點綴するさまも亦眺められた。東道の南山先生の明快なる說明は景致を一段と興味深いものにして呉れた。

梨棚や土に花ちる閑さよ　白亭

竹の秋話上手の庵主かな　庭示

深谷や櫻一樹の浮き出でゝ　ゆたか

松の綠見えそめし山を歩きけり　竹嶺

隈笹に咲きあらはるゝ躑躅かな　壘竹

義貞の敷皮の址や枇杷若芽　南川

山莊の一室には、さても不可思議な光景が發見される。屋根板の見える小室の中に疊汁に汚れた大卓に粗末極まる椅子が四個、中央にランプが垂れ下がつてゐる。この一

室こそは、南山先生大自慢の史蹟記念物なのである。話は大正の御代になる。

孫文と李烈均は身を以てこの山中に隠れ、同士の面々は夫々附近の民家にあつて、玆に支那革命の回天的謀議を凝らしたのである。その會議を行つた部屋といふのがこれなのである。

革命後の支那は果して幸福であつたかどうかは判定を下し難いところであらうが、孫文等の理想の實現は、ともかくもかゝる異國の僻陬に於て、企畫せられたのであることは感慨無量である。

更らに愉快なことは、昭和五年三月印度獨立運動の烽火が揚がるや、聖傑ガンジイはボースを使として此の地に至らしめ、在留の印度志士と共に策謀をこの室に議したのである。

されればにや、この山荘の松の梢には、日印支三國の國旗を象徴する荘旗が、海風にひるがへるのを見る。今や東洋の天地は晦冥、思ひを支那及印度の國情にめぐらせば、我國の重責は東洋の平和確保に懸つてゐる。この時この際、鎌倉の山中にかゝる史蹟の存することは興趣いよ〳〵深いものがある。

つゝじあり梨の花あり義烈荘　雨聲

唐人のかくれがのあと梨の花　白亭

卓も椅子も木の芽明りにほのかなる　同

遠き海の色まぎれずに花ぐもり　同

谷（やつ）の奥日はあまねしや梨の花

この谷戸（やと）の花のあとなる日は閑

昭和八年

昭和八年

荘へ入るうねうね道や木の芽風

荘を出て道を山手に遅ざくら

中食を山荘にすませて、長谷の大佛へ參詣した。東國總國分寺の舊跡、鎌倉大佛殿、露佛身青銅高さ四丈二尺五寸、周圍十六間一尺、面長七尺七寸、眼長三尺四寸に眉の長さ四尺一寸、耳の長さ六尺三寸、鼻長二尺八寸、口廣二尺七寸、白毫白銀高五寸徑六寸、肉髻高五寸徑一尺六寸、螺髪高六寸徑八寸其數六百五十六顆、膝間五間、佛手指周二尺八寸、重量二萬五千貫とあつて、日本三大佛の一つ、禮拜して近くその慈顏を仰ぐ。

山門のさくらあかるきお寺かな　竹嶺

大佛はすはりて在す花ふゞき　同

花咲くもちるも尊き御像かな　　同

大佛からバスを特發して鎌倉山住宅地へ登り、聽濤莊の客となつた。

聽濤莊主人米山雨聲老は、和室洋室を解放して句案のために供し、酒瓮の用意怠るところなく、一行の賑かなる笑聲に相和して遠き浪の音を聽く。春日遲々、吟腸清逸の趣であつた。

欄に凭れば松山越しの春の海　　南川

海見えて團子のうまさうらゝかさ　　曉星

松山の靜かさにあり蛙かな　　曇竹

馬車の幌外づしてゆくや春の風　　風來

浪の音は山のかなたや松の花

坐して見ゆる檜山松山春の風

春の山海の空よりくもり來し

松山も遠見の海も花ぐもり

莊へゆく道は小松のみどりかな

この水のゆくへ知らずやつくし狩

このあたりつくしあるべし草の色

鎌倉山の高燥なる住宅地には閑雅なる別莊が多い。交通も便利である。設備の整うた清閑の地をトして新居を構へられた聽濤莊主人の長壽健康を祝して、一同杯を擧げて萬歳を叫んだ。

日が暮れてから鎌倉山を徒歩で下りて、大船驛から上りの列車に乘込んだ。

南松庵に句會を催して

南風吹かば松のこゑきけ庵に來て

北の旅

五月の末つ方青函連絡船松前丸といふに乗りて海を渡る。この頃は海峡波靜かにて晴天うちつゞけば、船夫は俗に油凪とよびて、のびやかなる船路なり。

船を追ふ海豚皐月の油凪

函館灣口に近づけば、いつしか霧ふかくとざして、船の警笛しば〳〵耳を聾す。

船足をぐんとおとして夏の霧

やがて霧晴れて、船はしづかに拔止場につきぬ。

山々や夏を迎ふる灣の内

車を走らせて五稜郭へ向ふ。今は空郭を殘すのみなれど、元治元年工成りて六月函館

奉行小出大和守秀實之に據りてより後、明治元年かの大鳥圭介、榎本武揚等の史實を語るところ、五稜型の築壘堀割整然としてうつくし。

葉櫻や壘の内に何もなし

湯の川溫泉に一浴す。强烈なる鹽分を含みて好もしからず。風景また見るべきなし。歡樂の巷とのみ聞きて函館に引き返す。途々丘上翠轡の遙かにトラピスト女子修道院の洋館を望む。

薫風や丘をゆびさす案内人

大沼を車窓に眺めて北方へ向ふ。沿道の風物いづれもめづらかなり。

大沼を吹く風涼し木賊原

白樺椴松の山なみ夏の空

鬼蕗にひとむら涼し觀音蓮（みづはせを）

若葉木やなかに雄々しき白樺

虎杖も筮も丈なす夏の山

札幌とはアイヌ語の Sat Poro なり。石狩國豊平川汎濫して廣き原野を成せるより乾きたる廣きところといふ意なる由きこえたり。

驛の名も假名をたよりや椴松若葉

北海道にては春遅れて一時に來り、花といふ花その絢を競ふときけど、まことや今こそ櫻梨林檎の花盛りにて、再び春にめぐりあひたる心地せらる。

一望に林檎畠のどこも花

道廳種畜場は眞駒内といふところにありて牛馬豚鶏のたぐひあまたを養ふ。面積二千

八百七十餘町歩、牧草青々と生ひしげりて疊を敷きのべたるが如し。

見渡せば牧の小馬の涼しげに

月寒（つきさつぷ）の牧場は農林省の直轄にて緬羊の飼育場なり。一千九百ヘクタールの大地積の内をめぐれば、さながら大陸の旅もかくやあらんと思はる。

羊飼ふ山のひろさや夏の雲

北海道十一州の總鎭守官幣大社札幌神社に詣す。廣濶幽邃、この地にはめづらしき古松老杉の參差たるを見て神々しさひとしほなり。境内櫻樹を以て埋めたれば花時の盛觀は洪水老の談に盡きたり。

山蟬の聲も北地の神の森

定山溪（ぢやうざんけい）は豐平川の上流なり。僧定山のすゝめによりて明治四年開拓使道を通ず。白樺

の原始林、碧潭巨巖の風致、温泉の純和、まことに好遊の地なり。

澤音に湯の香に逆上せ若葉頃

北海道を離れて歸京の途すがら陸前國石卷に赴く。往昔は奥州第一の港といはれ商船の出入、漁艇の來往、日夜泛々、朝夕鬧々と古書にも出でたり。奥の細道には人家地をあらそひて竈の煙立つゞけたりと記す。今もなほ北上川をさしはさみて殷盛を極む。日和山公園に芭蕉の句碑あり。延享五戊辰歲三月雲裡房門人等督之、主命棠雨とあり。元祿二年五月十二日芭蕉この地に至りしより六十年の後なりけらし。句は雲折々人をやすむる月見かなと刻す。北上の河口銀波を寄せて、右に松島灣をひかへ、左に金華山を遠望す。この地の千葉武山淺野の三姉懇懃にあるじせらる。

眼の下に白波たちて風涼し

游志逑に道をかへして鐵路平泉へ向ふ。中尊寺にまうでんとてなり。途々平泉誌を繙きて藤氏の昔を偲びつゝ、奥の細道の吟記を慕ひ關山（くわんざん）にのぼる。

うつり啼く聲したはしや閑古鳥

光堂、經藏などくまなく拜觀していそぎ下山す。お山の掟聊か俗にすぎたらんやうにて清高の趣ならず。毛越寺（もおつじ）に至れば芭蕉夏草の句碑二基ならびたり。いふところの秀衡の跡をとぶらひて無常悲愴の泪をしぼり、達谷の窟に石面の大佛を拜み、厳美渓に郭公爺（かっこうぢいや）千葉酉吉老を訪ひて得意の美音を聞く。六十一歳の老爺朗かに口をひらけば、閑古鳥の啼聲玉を轉ずるが如し。東北耶馬渓の名ある清潭奇岩と共にまた名物の一つならめ。

深潭に今ぞひゞくや閑古鳥

須川まで奥は八里と谷若葉

岩盤に大小の凹みありて、小石そのなかに積む。急水ひとたびこれを蔽へば、水は渦まき、なかの小石は轉回して圓玉と磨きあげらる。これを探りもとめて何やらの呪禁になすとかや。

岩穴に珠玉をさぐる夏日影

南松庵即情三句

梅雨苔にそまりし色や庭の土

梅雨空に槻のくらさのまさりけり

夏萩に花が來て梅雨晴れんとす

惟然坊がかろ味のそれならなくに二句

若竹や葉さへ節さへそよぐさへ

若竹の末(うら)や葉になることいまだ

探題

藪添や馬の背をする今年竹

日本精神といふことを思ひ深めて

生得の茶心俳道娑羅の花

平安櫻田光可先生製作合金希臘匙を贈られて詠める

白玉をのせてうれしや黄金(きん)の匙

淺野氏より石卷清美公園の句を求められて

夏の日の大四阿に憩みけり

愛吟會同人用瀬東風老逝去一句

惜しや惜し暑さに枯れし老木とは

ちぎりたる茄子に畠のほてりかな

茄子ちぎる力や颯と葉の動き

とらでおく指先ほどの茄子かな

日の色やさかりをすぎし茄子畠

茄子畑に背負籠おいて人あらず

こけさうに畠出てくる茄子車

國富ます民の忍苦や茄子汁

茄子もらふ交り瓜を贈らばや

うす紅をさして芙蓉の愁かな

冷涼と坐してながむる芙蓉かな

衰へてはなびらつゝむ芙蓉かな

曉をあざやかに咲く芙蓉かな

朝霧の雫にいたむ芙蓉かな

あす越えん峠の見ゆる月の宿

見えぬほど月はのぼりし軒端かな

月よくて池水のうごき見ゆるかな

膝の子もおとなしくして月の客

草山のうすもみぢ見て水見舞

小湧谷にて一句

朝立のけしきは山の薄紅葉

菊の宴少年の棋客まゐりけり

活け頃の花を剪らすや菊畠

土の色につめたき見ゆれ菊の鉢

土間ぬけて奥のひろさや菊花園

身に入むや朝日のさゝぬ庭の内

身に入むや八ツ手の莟ほぐれ立つ

身に入むや竹藪添ひの日蔭道

ぎんなんを燒きつゝ狩の話かな

南松庵句會席上吟二句

いち早く冬待つ石蕗の蕾かな

冬を待つ園内の松青きかな

京の客衆を迎へて南松庵に會しけるとき、雨むし飛ぶよといふを見れば、おほわたのことなりけり。

この蟲いづれば、京にては日ならずして時雨來るとて、雨むしとはいふなめり。そのところのなつかしさを語りつぎて暮れぬ。

雨むしと京のよび名に佗びつくす

愛吟集十一月の詠題にたよりてよめる二句

沼邊行く荻の聲よりなかりけり

風吹けば花も押さるゝ八つ手かな

南松庵に遊ぶいとまありてよめる四句

植樹どれも多木となりてすこやかに

植ゑてまだ間もなき木こそ霜の朝

大霜や石蕗に枯葉の見ゆるほど
霜おりてつれなく剝ぎし庭の土

昭和九年

一月より
十二月まで

（百十八句）

昭和九年歳旦慶祝

すめらぎの御子のみひかり民の春

甲戌歳旦帖

男の子らに犬もまじりて町の春

初暦伊勢の御朱の据ゑどころ

橙を鎮めてうれし重ね餅

食積やあけて祝はん一の重

はやすでに賀状の山もこけさうな

をさな子や羽子つく門に抱かれくる

浅草

歳の市御堂にのぼり夜の景

人一倍寒さに弱いものだから、ことしの酷寒には用心に用心をしてゐたが、一月の二十八日に、愛吟會の連中が川越へ吟行するといふので、よせばよいのに、若い人々の供をして出掛けた。矢張り寒いので困りぬいた。星野山無量壽寺喜多院の荒廢した姿を眺めて、寒寺の哀しみを思はせられた。由緒あるお寺だが、末法の世では、どうにも仕方がないものと見える。

佛像も埃に寒し無量壽寺

喜多院の廣敷にゐて冬の庭

寺を訪ふ人もまれかや冬木道

電車の窓からは武蔵野の冬の景が眺められて、これはなか／＼おもしろかつた。

誰が畠ぞ茶の木垣して冬日影

自轉車の冬日にひかる遠野道

冬日野もこのあたりより嶺の眺め

若水居士を悼む

かなしさや便り越路の雪凪

蓼々居新築

梅が香や響きが臺の嫛々居

同じく句會席上吟二句

初午や萌黄につゝむ重のもの

笹鳴や南はあいて後ろ藪

雛の間へ年々に出す屛風かな

雛繪師にかゝせてまつるひゝなかな

生貝や四日の雛の段になほ

三溪園に遊びて二句

梅に佇ち池汀に行くも閑かなり

四阿に憩むや膝に梅の影

八聖殿にのぼりて

釋迦孔子餘寒の窓の明るさに

春の雪ひとゝき霏々となりにけり

下駄につく土もろともや春の雪

野の空や春の雪やむ雲うすれ

鎌田榮吉先生御長逝

冴返るみな教へ子のなみだかな

蘭の葉の土に寢るほど春の雨

春雨にぬるゝや竹の幾條も

庭前

春風や葉先のかはく庭の松

ことし四月はじめ

遲れたる花や高野の大遠忌

忙中餘情

花時とおもうて出るや日々の門

折にふれてよめる七句

齒朶の芽や土に這ふべき姿にて

下むいて二葉葵のひとつ花

玉房に八重山吹の誇りあり

芽立木の道を歩けば憇みたし

大木のすみ〴〵までも芽張りゐし

目高ゐるや水ふかさうな森の池

柏餅ひとつたうべて茶はぬるし

竹嶺老にいざなはれて東都の花を見まはる。自動車走りて常見ぬところを過ぐれば、震災後十とせを經たる、何もかもおもしろくて二句

花の名所どこもころりとかはりけり

ドライブや花の九段のつぎはどこ

娘このたび堀内山靜氏の許にとつぐ。新家庭の門出いとめでたかりければ

若葉木の揃ひ立ちたるこそよけれ

羽後丸機關長伊藤爲行君が長子の初節句に

滑車（せみ）の音とまりて孕む鯉幟

加賀小松の北江老師が息は、このほど洛の大谷大學を卒へて歸山し、結婚の悦びをも重ねられしと老師が消息し給ふほどに、なほ短冊を求められておくる。

ひとすぢに仰ぎのぼるや花の山

をり／＼の句六章

延びし枝も花をのせたる水木かな

牡丹見や衲僧に寄す酒一壺

牡丹見て新緑の樹下を慕ひけり

洗ひ場もものゝけしきや桐の花

くらくなる厩の内や桐の花

うち立てゝ幟の紋の匂ふかな

淺川

御陵道若葉をぬいて松の蕊

京王閣

若葉野を一ト目の臺にのぼりけり

井頭公園

大いなる朴の若葉に日はさしぬ

嵐峡遊船五句

つゝましく船にすわれば翠微かな

棹取りの舳先に立ちて風涼し

首出して深さのぞくや船納涼

就中みどりあらたに嵐山

青柳や舸子が溜りの嚢ごろも

渡月橋再築成る日めぐり合せて

橋出來て水も涼しく流れけり

無二庵を訪ふ三句

待つほどに百合活けくれし亭主かな

運ばれし燈に心あり夏座敷

膳を拭く女の見えて簾のれん

同じく出でゝ螢を見給へといはるゝまゝに四句

柴垣にゐて捕らへたる螢かな

螢見やむかふに黒き嵐山

槻の木の高みへそれし螢かな

行く水は桂に近き螢かな

昭和九年七月二十日俳書堂版季寄せの大增補成りて第十版を重ねければ

句仕事に涼しき題を探るべし

覇王樹の花百日の夏やすみ

龍宮の深さ見ゆるぞ箱眼鏡

涼しさや輕きめごちの衣揚げ

榛(はしばみ)の葉に穴さすや瓢蟲(てんとむし)

濕茸(しけだけ)や雲切れてさす日の強き

うつくしき双の腕や清涼着

めりやすのひとつふたつや朝習(あさならひ)

暑中休暇終りて秋の新學期を迎ふ

校僕のつくりし糸瓜休暇明け

銀座夜涼

秋澄むと燈の町にゐて仰ぐ空

秋風と庭の芭蕉と四句

秋風におどろいてゐる芭蕉かな

秋風の吹けどすべなき芭蕉かな

秋風にまかせもまるゝ芭蕉かな

秋風の音たてさする芭蕉かな

秋風と我れと二句

野の草を吹けばしみ〴〵秋の風

秋風に空の青さのしたはるゝ

葛飾市川吟行五句

おもしろき野松ながめて道の秋

釣人のうしろ芒の穂の光り

遠く來て秋光に在り國府臺

江戸川を一筋入れて大秋野

蘆原も秋ひといろに日のさして

偶感即情三句

嫁ぎたる娘の上や秋の蟬

萩の末刈らんと妻にもの言ひぬ

秋も末どこやら庭のよごれくる

神橋も枯木も池の鏡かな

なしといへど野づかさみちの冬の風

寺泊に若水翁の句碑を建立すと聞きて

やがて碑に雪つむことの待たれけり

小西白汀君平塚の病舍に逝く二句

冬の日やたゞあるばかり浪の音

二十有九年噫山茶花の散るに似て

ふとんきてねたるとうたはれたる景觀も大風害に
ねこそぎそこなはれて

冬來ても姿は悲し東山

大風害のさびれかたを語り合ひつゝ四條をあるく

加茂川もいかさま涸れてみゆるかな

子龍君も南枝君も結婚一句

嫁をとる若き友ありわれは爐に

手にとりて色のさえたる落葉かな

うしろから風が走らす落葉かな

歳末人事四句

つけなれし型の日記を買はせけり

妻ひとり果の大師へ詣りけり

封のまゝめくり暦を棚の上

ひろぶたに注連輪飾を編む夜かな

金澤八景

冬紅葉憲法草創の碑ありけり

大河内家の菩提所野火止平林禪寺へ信敬信定御兄弟に東道せられて御先祖松平信綱公の御廟に詣し奥庭深く入る伽藍林園閑淨にして名刹の威徳たゞならず六句

野の冬や名ある御寺のおもて道

掃砂に樫の實落つる御門内

緣の日や大藤棚も冬枯に

山茶花の方へお庭を歩きけり

牡丹も多木になりて日南かな

小坊主のお歳いくつか干菜汁

大河内氏アトリエ句會席上吟二句

爐に倚りて山行の話まとまりし

爐はいのちよく拭きこんでこもるかな

南枝君の結婚を祝ふ

冬障子座布團二つ晴れやかに

子龍君の結婚を祝ふ

主婦日記當用日記そろへ買ふ

香月君の結婚を祝ふ

新妻も襷かけてか大晦日

榮左君の結婚を祝ふ

ふたりして泊りかさぬる避寒かな

昭和十年

一月より十二月まで

（百三十一句）

昭和十年

正月をまたひとつして愚者の嘆

二日には師家へまゐると出たりけり

袴ぬいで祝ひ納めぬ三日の夜

三ヶ日俳家酒仙に徒爾ならず

佇てるわれも濱人に伍す初日の出

凍て凪の野路の初富士目に痛し

蓬莱にまつらむものよ古短冊

雪じみのある年賀状句友より

娘嫁してひとつすくなき箸袋

食積の重をひらけば百味の壽

福茶せむまづ御佛に供養して
獅子舞も飽かれつるかに來ずなりぬ
門松も簡素に父祖の心やり
三五人羽子の友なるよき子達
思ひ出は父の膝下にお年玉
初手前結び柳をとらぬうち
瑞山の苔なめらかに福壽草

京阪の旅七句

眺めては山をたのしむ寒早
陶工の住みつく都夕霰

洛の旅寺の寒さもたのもしゝ
しぐるゝや繪師が好みの門(かど)つくり
紗賣る聲や地上の朝日影
棕櫚剝いて馬に託(かこ)けるほどありし
大阪の町もよくなり冬日和

或る日の庭

寒肥をなまなかにして凍て荒るゝ

寒の內に詠める七句

曉の寒の太鼓を寺なれば
見るからにちゝかむ青木寒の朝

われのみか妻も年寄る寒の朝

水のめば寒中の味に徹しけり

庭へくるものみな友よ寒雀

大寒の夜の椎の木をもの怖ぢす

ものを見る眼は寒月のごとからめ

大河内氏アトリエ句會席上吟

毛絲編むやピカソの畫集卓の上

南枝居初句會探題

初飛行國土のまもり今は空(そら)に

幼きころをしのぶ

下萌に遊び疲れぬ子供たち

愛吟會の新進作家と語る

白桃の枝のさきまで笑む蕾

白亭君繪筆を持ちそむ

あかき實を染めて繪になる藪柑子

米山雨聲老喜壽之賀

歌垣に花の兄とや匂ふ梅

飼犬の春

母(おや)犬(いぬ)になりて日々なる風ぬるむ

南松庵へ行く道に野原のけしきあり

草の道末黒の芒踏みかねし

東都勝景の一なる深川清澄庭園にて第四十五回新川集句會を催しけるをり八句

殘寒に生れし魚の游ぐ池

鯉魚を見す池の深さは春寒く

大池に風逸走す春寒く

海桐ひかりつゝけ池水は春寒し

鴛鴦の聲哀音を曳き池餘寒

涉りゆく池中の布石春寒し

水石の景逸にして蘆の錐

殘寒の石の膚に執著す

ふらこゝの揺るゝにまかせ立ち去りし

春蟬の鄕校を出て博士（はくし）たり

卵產む鯉かしきりに水の綾

飛ぶ蝶に目がれせずなほ佇ちつくす

下りて來て葉洩れ日を縫ふ一つ蝶

はやすでに雀のだらこ花ざかり

樓斗の花のむらさき見れば濃き

學僧の机上を飾る金盞花

雨水のながれてひろき春の庭

土鉢置けば色似つかはし春の庭

實になればぺん〱草よ花ぐもり

竹やぶを遠くにみれば花ぐもり

花ぐもり廟の裏に蜂の聲

埼玉縣彦成村四句

田の人に道きゝながら春の風

御手洗は花の明りに溢れゐる

櫻咲く寺を指さし船を捨つ

道々の土筆を摘みて一里ほど

眼について青木の花の夥し

葉櫻の庫裡の膳立て百ばかり

八重洲園茶房

テイガール五月の窓をあけて來し

靖國神社

境内を風の去る音あやめ池

五月四日鎌倉山聽濤荘にまかりて二句

畑主は山窪に住み麥の秋

風波よ皐月ぐもりの遠つ海

西郊愛吟會席上吟三句

琉金の鉢の掛簀を忘れざる

南へ末かたむきて今年竹

熱帶魚佛祖の國をおもひもす

新川集句會席上吟四句

青蘆の泡吹蟲も暑かるべし

瓢蟲薄の青さ眼にいたし

大蚊は葉影の濃さをしたひ棲む

大蚊の燈にくる窓は椎の下

曹子君と五月の植物園に遊ぶ

草の名を讀みうつる眼に夏の蝶

惠而君の結婚を祝ふ

曹達水うなづきあうて何の味

梗村君の結婚を祝ふ

風鈴の二つ心旨に交響す

風仙子君の結婚を祝ふ

目もはるの佳景に籐椅子寄せあひて

日燒して旅は終りぬわが家の夜

酸漿の青さに蒸すや土の膚

また蟻のあがるを追ひつ客の前

甘酒のかざに夜凪ぎもあつかりし

へた蟲のまた落すかや柿の蔕

柚の花の散るや貴船の走り水

崖すゝき川洗濯へ下りる道

麥搗いて登山の客を待ちにけり

かいづ釣る潮は照る〳〵深く澄む

南風に莞爾と進むヨットあり

眞夜中に覺めて蚊遣のこもり香を

六月十六日和紅の出産を見舞ふ

産院の庭樹の風はあつからじ

和紅の死

山靜氏の妻和紅は、余のたゞひとりの女の子なり。結婚一年にして男子を分娩したれど、肥立わるくて慶應病院に呻吟すること四十五日、遂に七月二十九日の薄暮に至り不歸の客とはなりたり。夫君にも別れ愛し子をも殘し逝きしその胸中を察し斷腸の思ひ深し。和紅妙光大姉。行年二十四歳。鶴見總持寺に埋葬。

たゞひとりゆきゆく道は暑からめ

嘗ては「なにとなく秋ちかき風今朝の庭」と詠みまた「幼な子のうなじにそつと落葉かな」とも詠みける和紅の俳句は、たゞひとすぢに哀しみを追ひけるものか。彼女が手記の中より絕吟となりしものを見るに、

夢のやう迷ひ飛び來る螢かな　　和紅

とあり。みづからもまた無常を大悟し二十四歳の華と散りしあはれを思ふにつけて。

秋風に吹きちる雲はとめあへね

二十九日は命日なれば我も妻も、ふたりがおなじ心もちて、佛間の濡れ縁に集り花夕顔の一花開くを見守りけり。二句

ものいはぬ夕顔の花たゞに白

夕顔は白光佛(びやくくわうぶつ)におはすかや

所願忌、小練忌も束の間に過ぎて、檀弘忌もきのふになり、やがて九月の十五日は滿中陰よと指折るまゝに。

七々の忌日に秋もはや老けし

藤寺の雪庵老師は、和紅も幼き頃より知遇を戴きしを思ひ、御供養をたのみまゐらせ御袈裟一肩を奉納するとて。

袈裟にほぐす露けき萩の染小袖

大河内子爵のお招きにて秋雨つのる一日を眞鶴岬の清美庵にまかりて五句

晴間あれば鵙がすぐ鳴く裏の山

松に据ゑし石も濡れだつ秋の雨

吊り釜の下かきたてゝ秋の暮

風吹くにまかせて栗の笑む梢

秋風に送られてくる浪の音

探題二句

高原に宿一つあり葡萄棚

葡萄食うて高地の旅も了りけり

高田呂哉氏夫人の訃

秋は泪水屋の壁の掛行燈

武蔵天覧山吟行七句

山萩の高さをぬいて芒の穂

瓢を突く子に音たつる秋の水

秋に遊ぶ人は河原に我も行かん

河原路に出水のあとゝいふを見て

名栗川こゝと曲り秋日影

夕冷になる山の町妓樓あり

夕冷や木出しの里の拭ひ空

うれ柿や落葉がよごす木の下を

あまくなりし柿はなつかしけふも採る

柿をむく人の瞳は澄みつくす

鯊舟といふは動かず灣の水

千駄ケ谷の茅屋にて

鳥渡る明治神宮に近く住めり

飯塚雪蹴君急逝

行く人の影は花野にもう見えず

高田呂哉氏夫人小練忌

冬日さし踏む人もなき露地松葉

初霜やそら豆の芽はつよさうに

茶梅のしまひの花が一つ二つ

八つ手咲いて町の社を守り住む

鷄飼へばきたなし八つ手花立ちて

木をかぶる路は落葉の一ところ

落葉絶えし路になりつゝ野に出でし

落葉頃熊手戸閾日はさして

松の葉は榎落葉を溜め易く

木の股に風蘭のこしみな落葉

昭和十一年

一月より
八月まで

（百十三句）

昭和十一年

丙子新春頌歌

皇子さまのお二方在(ま)し國の春

初東風を鳴らしそめけり餝竹

初富士は遙かなれども明暉あり

いつの間の賀客の名刺受盆に

畫枠みな重ねて餝る鏡餅

春興の一句を乞はれ酒筆詫ぶ

ざぶ〳〵とつむりにかけて初手水

門あけて固く結ひけり初國旗

裏白のしのびやかなる色は春

子(ね)の春の句とてえらびぬ初披講
納めたる松はねかせて結ぶ霜
寒波寄す強大の國家あるを知る
寒波寄す國の力を感ぜずや
寒波寄す國の機構は脈搏てり
寒波寄す太平洋を護る國
寒波寄す空の射る矢は眼底を
なほ未だ梅の寒さに心暗し
齋場の侍立に梅の寒さあり
梅の寒さ學校建築に曲線(カーブ)なし

二・二六事件のあと二句

矯激を愼む梅花たゞ白し
何もかも鎭靜に歸し梅あり
電車から梅のある家見忘れず
ふた股の幹に撞木し梅の花
ちる梅が棕櫚毛の上へ吹かれつきし

亡き娘和紅をおもふ

こよひ雛の前にて夫婦ものいはず

某檢眼院にて四句

世の春を語り燈を消す檢眼師

検眼室春光を絶ちレンズの音

試視表は冷靜に垂れ春の壁

視の角度運命の春を凝視しぬ

上代もうつし世も櫻さくら諷ひ

でぱあとを急がすのぼり春の窓

でぱあとを疲れ下り春の街を忌む

殘り地に麥出來てゐてひらけゆく

青木の花いつまでも花うるさくて

八重山吹を寫しゐて跼み痺れけり

づく／＼に青葉の枝を濡らし挿す

著莪の花嶺の光りに雲遊ぶ

椎の花のおもき香畫圖を封じける

朴若葉山の明るさ透きて見ゆ

姫歯朶が殖えて五月の庭なりき

和紅亡きあと

ひとり子に五月を餝り妻の思ひ

フヰルターの效果五月を感受したり

落花たゞ浴びてもみたき童心に

明治神宮敬拝

ものゝ影なき神さびの道は暑くも

內苑の芝のお手入夏は濃し

或る日

蠅を打つわづかに膳のまはりのみ

赤になり佇つところビルに熱氣あり

光陰如矢

吾子を亡ひ吾子に別れし夏は來にけり

みなし兒四句

セルの兒よ夕闇にゐるみなし兒か

セルのみなし兒猜疑に追はれ夕闇に

セルのみなし兒弱ければ夕闇したふ

セルの孤兒に惡を囁く世をにくむ

句あり繪ありこの遊民に暑さあり

派出所に日覆が出來て町家笑む

東都百花園三句

梅雨汚みの門の文字も骨董か

大きな木梅雨のおもみにぢつとして

梅雨の土橋急ぎ腐肉を踏む思ひ

太陽よわれに苦熱の詩を得さす

熱雷をあびて坐しゐる一境地

避暑をおもひし若き日の日色路にあり

母なき兒二句

蟬が鳴き幼な兒は乳に泣く時か

幼な兒よ暑さに目覺め泣きもせず

和紅大姉の新盆

娘の新盆に訪ねられたる人と語りつ

つゞいて七月二十九日は小祥忌なり二句

ことしまた咲く月見草思ふまじ

暑さはげし一と周りして暑さかなし

秋風賦第一室

秋風は天鼓を撃てり大魔界

秋風の和音を生めり簫

佛といふはむかし印度の秋の風

秋風賦第二室

秋かぜは地に湧くものか草の花

秋かぜが藪のつかれを泣かすのみ

奔流につかれなし秋の風は立つ

吹きおろす山の秋かぜ壺酒は澄む

路行きて踵に觸るゝ秋の風

秋風賦第三室

秋風に一意戯論を離るべし

秋風に一意句案を洗ふべし

秋風の吹くところ句想轉ぜずや

秋風は落莫たらず句志は燃ゆ

句の道はどこを通るも秋の風

秋風賦第四室

秋風に漁人の念は綸の先

秋かぜのおもしろさよりいまはなし

いま去つて行く秋かぜに追ひつかず

秋風廓然たり時人新たなり

秋風を解して世外の人ならず

秋風の十字路に死はふと易し

ゆけど〳〵秋かぜわれをつゝむなり

秋風賦第五室

かぜ秋になりぬ人みな詩を持てり

國土崇高詩は秋風に氾濫す

平凡なスタート四句

月を知りて仰ぎしむかし母の膝

秋の夜の母のぬくみに育ちし子

母の手にかへす子秋にひやすまじ

母は一途に乳房を與へ秋をいふ

九月四日事務所にて腦貧血に倒れしときのこと四句

秋光が眼を射しあとはわれならず

このまゝになれるものなら露ほども

秋口に心の用意なきを知る

白亭の肩につかまり秋日避く

つはのはなつまらなさうなうすきいろ

西寄りの風に空澄み冬近し

晝日中心おごらず冬近し

十一月二日愛吟展三句

屛風描きし餘技の誇りに冬日さす

餘技の繪の深さを知りぬ冬めく日

初冬や餘技の主觀に感じ入る

わが銀婚の內祝ひを

五々の契りを菊の友より祝はれし

春輔君の結婚を祝ふ

喜びの日の秋晴は極みなし

十一月二十一日新川集句會を吟行にうつして

熱海一泊三句

つゝましく冬の湯槽に一夜客

にごり江のよるの溫泉の町冬ぬくし

みな去なし宵寝笑はるゝ冬ぬくし

十國峠越え

おとなしき運轉手バスを冬山へ

强羅某邸二句

富豪邸の留守居落葉を掃きもせで

温水をおとす仕掛に冬の鯉

觀光ホテル

學生にヒュッテの娘なに怒る

下山のとき

枝蜜柑われも持ちにき電車待つ

印刷所風景

機械とめて職工は飯冬夕べ

活字ケース思想は凍てゝ散亂す

昭和十二年

一月より十二月まで

（六十五句）

暦日のあゆみゆるみてお正月

三ケ日といふ休養を民もてり

兒は雜煮すませよろこぶちよこれえと

正月のでんきすとうぶ裳に熱

印刷いんくの匂ひ賀狀に精氣あり

新川集句會席上吟一句

雜貨かくも人を誑かす歳の市

鷗外先生在りし日の省の梅を想ひき

文墨の條件反射梅が嗤ふ

時の順使に梅の名園何處へ行く

庭の梅知らずごろふの野に馳せて
動物主任園の梅咲く谷が好き
雪映えを眞額に受け來る女

都心

母と出て桃の一枝買ひ來し子

野趣

桃に耕す父をはなれぬ女の子

大衆と新聞

新聞は都塵をはこぶ桃の家

思想の機械化を排す

今し心に桃のゑまひを示唆すべく

教育家の歐米依存を憐む

桃活けて我が子守唄靜かにうたへ
野草芳しそれなるがまゝに
草の芽をいたはつていふ老婦人
用の手に柳さくらが思ひあはされ
柳さくら妻の悔い夫の悔い
そのときふと思ひかへす落椿の道
河東先生が眞實讃えられ落椿の道
雨の花一鳥迅きになほ覺めす

新川集句會席上吟

沈丁の香に或るときの物忘れ

山の手愛吟會席上吟二句

花が散るたなご網だけ高々あげる

思ひ出の野道どこから散る花か

白亭君結婚記念句會席上吟

銀座混雑柳の芽人々の眼

白亭君の結婚を祝ふ二句

花の詩をかたりもぞするよき夫婦

妻待つとおもふ道なる花も今

伜の慶大卒業式に列して三句

人の子とわが子世に出て競ふ春

うれしさの世の春にわれとわが子あり

學を卒へ業にひたむく誓ひの春

新聞「朝日」に謝す

「神風」の感激春を暑くしぬ

網公いでゝ擴充の世を宣示したり

興るものは生硬に見え若葉重し

錦魚虱水槽の壯麗に思ひ遠し

童心にかへりて二句

母の手に武者人形の箱重く

幟鯉大きく垂れてうなされし

する〳〵と楓の若枝走り垂る

鳩がふむ樫の落葉に日はつよし

瀬の音に岩魚の育ち占はん

大河内氏外遊送別句會

夏海の色は迎ふる畫人の眼

奈良大阪名古屋の旅より五句

若葉撮る鹿の毛並はあら汚な

奈良の新緑手輕にすませ文樂へ

鯛を食ひ大阪びとに夏を聽く

プラネタリウム商都の人に夏を教ふ

中京といふ名たがへぬ薄羽織

富士五湖の旅

新緑の林間に西湖ひかる乙女

山の手愛吟會席上吟二句

劇場を包む人家は夏に倦む

劇場の燈はものいはす蛾と遊ぶ

明治神宮內苑の花菖蒲拜観五句

菖蒲田へ森の下道降り加減

聖慮いまに名種の菖蒲八十花

八つ橋も順路の許し花菖蒲

濃みどりの池水夢の睡蓮花

水無月の隔雲亭は舊御座所

新川集句會席上吟

無意識に妻を愛して燈は暑し

愛吟日曜會席上吟

カウンター音たて果鋪の奥あつし

七月の末東京驛に出征の諸氏を送る二句

上服（うわぎ）とる若人の胸に刻む祖國

旗持たぬわれは帽振り汗ぬぐひ

春輔氏等と明治神宮へ吟行しけるをり二句

芝の上に聲なき夏をひろげたり

次の時代の人に古り行く夏の園

人のいへるをそのまゝに一句

冷房といふ夏らしき語を生めり

和紅大姉の大祥忌

百合活けてひそかにおもふことばかり

曹子君の出征を祝ひ日章旗に書す

東洋の一大樂土きづく汗

梨葉第二句集類題別索引

春

青木の花　一三〇・一四八
青ぬた　一〇
青麥　一四八
薊　一六(2)
蘆の錐　一三八
淺蜊　一〇
梅　一〇・二六(2)・七三・七四(2)・一〇四(3)・一二七・一四六(3)・一四七(5)・一六三(3)・一六四(2)
樓斗の花　一三九
風ぬるむ　一三七
菊の芽　一〇
木地爐緣　一四
金盞花　一三九
草の芽　一六五
鯉の產卵　一三九
木の實植う　一〇
木の芽　七五(2)・一〇六・一〇七

木の芽風　八一
冴返る　七四・一〇五
櫻　一二(2)・八一・一四八・一三〇
さくら餅　三一
殘雪　一〇(3)
汐干　一三(2)
下萌　一三七
齒朶の芽　一〇六
春曉　七四
春光　一四八
春泥　二七(3)
末黑野　一三八
蒲公英　二八
蝶　一三九(2)
沈丁花　一六六
つゝじ　五三
椿　一四・七五・一六五(2)
梨の花　八〇
薺の花　一三九
菜の花　一四

猫の夫　九
初午　一〇四
花　一二・一三(2)・一四・一五(2)・二八・二九(3)・三〇(3)・三一(2)・七四・一〇六・一〇七(2)・一〇八・一三〇・一四九・一六五・一六六(4)
花曇　一一・一二(2)・一三・八三・一三〇(3)
花時　三一・三三・一〇六
花のあと　八〇
春　一四七・一四八・一六七(3)
春暑し　一六七
春風　一四・八三・一〇六・一三〇
春雨　一三・一〇五(2)
春蟬　一三九
春の壁　一四八
春の草　一六五
春の雲　一三
春の月　一三
春の浪　二七(2)

春の庭　一三九・一三〇
春の畑　一一
春の日　一三
春の街　一四八
春の窓　一四八
春の水　二八
春の山　八三
春の雪　一〇五(3)
彼岸　七五(2)
雛　一〇・七三(2)・一〇四(3)・一四七
ふらこゝ　一三九
木瓜　一三
松の花　八三・八三
水木の花　一〇八
桃　一一(4)・一三七・一六四(3)・一六五(2)
柳　一一〇・一六六
柳櫻　一一・一六五(2)
山吹　七四・一〇六・一四八

餘寒　二七[2]・一〇五・一二八[6]・一二九

夏

青嵐　一五
青梅　四四
蒼鷺　三五
青芒　五二
青酸漿　一三三
朝習　一一三
麻のれん　一一一
紫陽花　三・一七
汗　一七一[2]
暑さ　九三・一三三・一三四・一三五・一四九・一五〇・一五一[2]・一五三・一七〇[2]
雨蛙　一五
あやめ　四三・一三一
蟻　一三三
泡吹蟲　一三二

岩魚　一六八
花卯木　一六・三六
薄羽織　一六九
團扇　一七
上服とる　一七〇
扇　一六
蚊　四四・三六
蛾　一六九
かいづ　一三四
大蚊　一三二[2]
柿の花　一三三
樫の落葉　一六八
柏餅　一〇七
雷　一五一
蚊遣　一三四
閑古鳥　九〇[2]
生布　一七
桐の花　一七・一八・四三・四四・一〇九[2]

金魚　一三一
錦魚虱　一六七
水鷄　四八
郭公　一六七
薫風　八六
鯉幟　一〇八・一六八
五月　四三・八五・一三一[2]・一四九[3]
櫻桃　一七
皐月波　四二
椎の花　一四九
濕茸　一一三
著莪の花　一四九
娑羅の花　九三
白玉　九三
新樹　一五
新緑　一一〇・一六八・一六九
翠微　一一〇
睡蓮　一七・一七〇

涼し　四三・八六・八八・八九・一一〇[2]・一一三[2]
納涼　六四・一一〇
清涼着　一一二
蟬　五〇・八八・一五三
セル　一五〇[3]・一五一
曹達水　一三三
瀧　五六
竹の落葉　四八
筍　四六[2]
月見草　一五二
梅雨　三五・四九[2]・九三[3]・一五一[3]
瓢蟲　一一三・一三二
籐椅子　一三三
どくだみ　一七[2]
登山　一三四
茄子　九三[3]・九四[5]
夏　一五〇・一六九[3]・一七一
夏來たる　一五〇

夏座敷　一二二
夏シャツ　一八[2]
夏姿　四三
夏の雨　五三
夏の海　四三・一六八
夏の霧　四一・八五
夏の雲　八八
夏の園　一七・一七一
夏の空　八六
夏の蝶　一三三
夏の日　九一・九三
夏の山　八七
夏蜜柑　四三
夏迎ふ　八五
夏やすみ　一二三
夏蕨　四三
熱帯魚　一三三
熱風　六五
幟　一〇九
蠅　一五〇

薄暑　五一[2]
箱眼鏡　一二三
葉櫻　八六・一三一
蓮浮葉　一六[3]
花菖蒲　一六九・一七〇[2]
早鮓　一八
濱芙　四三
日覆　一五一
避暑　一五一
日燒　一三三
風鈴　一三三
二葉葵　一〇六
朴若葉　一一〇・一四九
螢　五四[4]・五五[3]・一一一[4]
牡丹　一〇九[2]
盆　一五二
蠛蠓　一六
眞菰刈　三四
觀音蓮（みずはせを）　八七

水無月　一七〇
南風　三三・八四・一三四
深山櫨　五三
麥の秋　一三一
武者人形　一六八
目高　一〇七
夕顔の花　一三六[2]
虎耳草（ゆきのした）　五三
柚の花　一三四
百合の花　一一一・一七一
林檎の花　八七
冷房　一七一
若楓　一六八
若竹　四五[2]・九二[3]・一三二
若葉　三九・八七[2]・八九・九一・一〇八・一〇九[2]・一四八・一六七・一六八

秋

秋　一一四[2]・一三九[2]・一五五[2]・一五六
秋風　四・五・一九・六六[3]・六七・一一三[6]・一三六・一三八・一五二・一五三[8]・一五四[9]・一五五[4]
秋澄む　一一三
秋出水　一三九
秋野　一一四
秋の雨　一九[3]・一三八
秋の暮　一三八
秋の蟬　三・一一四
秋の日　三[2]・六七・一三九・一五六
秋の水　四・一三九
秋の夜　一五五
秋晴　一五七
秋深し　一三六
雨むし　九七
薄紅葉　九五
うそ寒　五
荻　九七

落穂　六七
柿　一四〇$_{3}$
菊　九五$_{3}$・九六・一三七
菊膾　五
黄葉　六七
ぎんなん　九六
栗　一三八
暮の秋　六七・一一四
蟋蟀（こほろぎ）　三
コスモス　五
木の實　一一七
秋光　一一四・一三六
西瓜　一八$_{2}$
芒　六七・一一四・一三四・一三九
地藏盆　一九$_{2}$
月　四$_{2}$・一八$_{2}$・一九・九五$_{4}$・一三五
蔦紅葉　六八
露　一三六

蜻蛉　六六$_{2}$
萩　六六$_{3}$・一一四・一三七
鷲　一四〇
はたはた　六六
花野　一四〇
冬隣　五$_{2}$・六七・九六$_{2}$・一五六$_{2}$
葡萄　一三八$_{2}$
芙蓉　九四$_{5}$
糸瓜　一一三
木瓜の實　一九
水見舞　九五
身に入む　九六$_{3}$
木槿（むくげ）　一九
蟲　二〇・六七$_{2}$
鵙　五・一三八
やゝ寒　六八
夕冷　一三九$_{2}$
ゆく秋　六七

渡り鳥　一四〇

冬

熱燗　二六
霰　一三四
魦（いさゝ）　一三五
凍てる　一五九
猪　二五
兎狩る　二五
枝蜜柑　一五八
狼　二五$_{2}$
大晦日　一一九
落葉　二〇$_{3}$・二一・一二六$_{2}$・一四一$_{5}$・一五八
枯木　一二五
川涸る　一二六
寒（かん）　七二・七三$_{2}$・一二五$_{2}$・一二六$_{3}$

寒供養　七三
寒月　一二六
寒肥　一二五
寒雀　一二六
寒波　一四六$_{5}$
寒旱　一三四
毛絲編む　一二六
木の葉　二〇$_{2}$
小春　六八
暦　一一六
笹鳴　一〇四
山茶花　二〇・六八・一二五・一二八・一四一
寒さ　三五・七三・一〇三・一三五
しぐれ　一三五
終大師（しまいだいし）　一一六
注連編む　一一七
霜　九七・九八$_{2}$
棕櫚剝く　一三五
十二月　二一$_{2}$・六八$_{3}$

石蕗の花　一〇・一五六
歳の市　一〇三・一六三
年の暮　六・七二
日記買ふ　一一六・一一八
初霜　一四一
初冬　一五七
春いそぐ　三六
避寒　一一九
ヒュッテ　一五八
冬　一五七
冬枯　一一七
冬木　三六・九七・一〇三・一一八
冬來たる　一二五
冬シャツ　三六^{2}
冬障子　一一八・
冬田　六八
冬ぬくし　一五七・一五八
冬野　一一七
冬の風　一二五
冬の鯉　一五八
冬の月　三五
冬の庭　一〇三
冬の日（時候）　一一五
冬の山　六・一五八
冬の夕　一五九
冬の日（天文）　一〇三^{3}・一四〇・一五七
冬日向　三一^{2}
冬日和　一三五
冬めく　一五七
冬紅葉　一一七
干菜汁　一一八
鮪賣　三六
八つ手の實　三六
毛布　七三^{2}・七三
八つ手の花　九七・一四一^{2}
藪柑子　一三七
雪　一二五・一六四
雪蓑　一〇三
爐　一一六・一一八^{2}

新年

裏白　一四五
裏白連歌　七二
お年玉　一三四
鏡餅　一四五
飾臼　九
門松　二五・一三四
食積　一〇一・一三三
三ケ日　一三三・一六三
獅子舞　一三四
注連あき　九
春興　一四五
正月　一三三・一六三^{2}
雜煮　一六三
橙　一〇一
店卸　九
手斧始　九
年棚　七一
屠蘇　七一
鳥總松　九
年賀　一〇一・一三三・一六三
掃かぬ嘉例　七一
掃初　九
箸袋　一三三
初鏡　七二
初句會　一四六
初國旗　一四五
初東風　一四五
初暦　一〇一
初茶湯　九・一三四
初手水　一四五
初春　二五・七一^{2}・一〇一^{2}・一四五
初日　二五・一三三
初飛行　一三六
初富士　一三三・一四五
初湯殿　七一
羽子　一〇一・一三四
福壽草　二五・一三四